The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪天満宮御文庫所蔵『雕題』（中井履軒撰）諸本について
Author(s)	寺門, 日出男
Citation	中国研究集刊. 1991, 10, p. 79-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61016
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪天満宮御文庫所蔵『雕題』（中井履軒撰）諸本について

寺門　日出男

序

大阪天満宮御文庫には、二万余巻と称する、漢学者近藤南州（一八五〇～一九二二）の蔵書が、収められている。

近藤南州、本名は元粋。心学者近藤名州の第三子として伊予松山に生まれた。明治三年（一八七〇）に江戸昌平黌に赴き、芳野金陵について朱子学を修める。帰藩後三年間、明教館（伊予松山の藩校）助教となったが、後、大阪に居を移し、猶興書院（大阪市北区旅篭町）を起こした。南州の上阪の正確な時期は未詳であるが、南州の死後、門人達の建てた頌徳碑（大阪天満宮境内）に、「明治初年」に大阪に来たと刻されていることから、おそらく明治十年前後なのではないかと思われる。彼は猶興書院で子弟を教授すること四十余年に及び、来たり学ぶもの頗る多かったという。『孝経集注』・『箋注十八史略』・『明清八大家文読本』等、広範な、しかも夥しい撰述がある。

さて、南州の蔵書が同御文庫に収められた経緯は、長沢規矩也撰『大阪の天満宮御文庫』（『長沢規矩也著作集』・第六巻三六二頁～三七四頁・汲古書院、初出『日本古書通信』・四十三巻・昭和五十三年）に詳しい。それに拠れば、南州の蔵書中の貴重書は、その死後、古書肆によって売りに出された。そして、それ以外の蔵書が、後に南州の門人たちの募金によって南州の遺族から買い取られ、大阪天満宮に寄贈されたという。

現在、南州の旧蔵本を中心とした大阪天満宮の漢籍は、ほとんど顧みられることがない。その理由としては、一つには先に挙げたような経緯から、例えば長沢氏が文献学的観点から「（大阪天満宮御文庫の南州旧蔵書には）当時でも、今日でも、貴重の書籍と鑑定されるようなものは、ほとんど一部もない。」（同三六四頁）と述べているように、個々の書き込み等の価値は、一般には認められていないこと、もう一つには南州自身の漢学者としての名声が、あまり高くないことが考えられる。

しかし、今回、同御文庫に収められている中井履軒撰『雕題』に関する諸本を調査したところ、これらの中に南州の非常に重

要な書き込みがあることを発見した。以下にその報告を行ないたい。

一

天満宮御文庫に収められている『雕題』諸本には、『大阪天満宮御文庫漢籍分類目録』（長沢規矩也等編・昭和五十二年・大阪天満宮）に拠れば、次のものがある。

甲、版本

『春秋左伝雕題略』六巻―弘化三年（1846）刊

『小学雕題』二巻―明治十五年（1882）刊

乙、写本

『七経雕題略』八巻―近藤南州手識本（巻五配木活字印本）

同八巻

『七経雕題略』存一巻―（巻四、左伝）

『史記雕題』二十三巻附削柿―近藤南州手校手識本

『戦国策雕題』八巻―近藤南州手校手識本

『古文後集雕題』二巻―近藤南州手校手識本

これらの中で、特に注目すべきは、乙の諸写本に見られる近藤南州の書き込みのあるものである。この南州の書き込みは、今まで殆ど研究されていなかったが、我々にさまざまな情報を提供してくれる。

例えば、『史記雕題』写本の場合、巻末にある次の書き込みから、南州が『史記雕題』原本と校合して、写本の誤謬を改めていたことが分かる。

（前略）今一々諸を履軒翁が手書本を参考し、直に訂正せり。以て他日の浄写を俟つ。是の本　世に出でなば、翁の霊も亦、当に地下に瞑すべし。

明治十六年一月五日暁窓に灯を挑げて書す。

南州外史近藤元粹

この書き込みが重要である理由は、以下の経緯による。すなわち、明治維新前後の頃、懐徳堂の財政が次第に困窮し、学校預人・中井桐園によって、蔵書の一部分が売却されたという。次いで懐徳堂は、明治二年に廃校になり、その後明治四十四年に懐徳堂記念会が設立される頃までは、履軒の自筆『雕題』諸本の所在は、よく分かっていない。例えば、『七経雕題目録』および『七経雕題略目録』（いずれも懐徳堂文庫所蔵・明治二十一年・中井木菟麻呂撰）には、『七経雕題』・『七経雕題略』原本の内、『七経雕題』中の春秋左氏伝、および論語以外の『七経雕題略』は、いずれも「浪華の水野氏」なる人物が所蔵していた。それを中井木菟麻呂（天生と号した。中井家最後裔の人物）が、明治二十一年五月に譲り受けたという記録が残されている。このように、懐徳堂の衰退期以降、履軒の撰述を初めとした所謂懐徳堂遺書は、相当な部分が散逸していたらしい。現在、懐徳堂文庫に収められている懐徳堂遺書は、先に挙げた例のように中井木菟麻呂等の拾遺によるところが大きい。

『史記雕題』原本も、明治四十四年の『懐徳堂展覧会目録』に載せられておらず、南州が書き込みをした時期の所在は、よく分からなかった。従って、先に挙げた南州の『史記雕題』写本への書き込みは、自筆『史記雕題』が、少なくとも明治十六年頃には、大阪市近辺にあったことを裏付けるものである。

しかし、南州が果して本当に『史記雕題』原本を参照して、校正を行なったのかという疑問も当然起こってくる。そこで、現在、大阪大学懐徳堂文庫に所蔵されている『史記雕題』原本との対照を行なってみた。

天満宮御文庫のものも含めて、各地に散在する『史記雕題』諸写本は、二系統に分けられるが、総て竹島簣山（履軒の弟子）が二十四巻に整理し、中井柚園（履軒の子）が校正したものに基づいており、共通した写誤が数多く見られる。これらの写誤（甲）を南州は（乙）のように改めている。

①魯周公世家「是為魯公」注

（甲）　「是為魯公」句、当在下文「代就封於魯」。「公」宜指伯禽。

（乙）　「是為魯公」句、当在下文「代就封於魯」之下。「魯公」宜指伯禽。

②宋微子世家「卿士」注

（甲）　此「卿士」、通卿大夫之士之辞。

（乙）　此「卿士」、通「卿大夫士」之辞。

③越王句践世家『正義』・「幎吾両目」注

（甲）　注「幎吾両目」之「幎」字、猶「掩」也。

（乙）　注「幎」、猶「掩」也。

④陳丞相世家「左丞相不治」注

（甲）　官上（「上」は「たっとぶ」の意）右、古法之法也。

（乙）　官上右、古之法也。

これらの南州が改めた（乙）は、総て『史記雕題』原本と完全に一致する（注1）。とりわけ③の（甲）は、おそらく筆写の段階で、該当部分をより明確にするために書き加えられたものと考えられ、原文と異なっているということは、原本を見ていなければ指摘出来ない性格のものである。

以上の比較対照から、南州が『史記雕題』原本を見たことは、ほぼ疑いのないことと考えられる。

二

南州の書き込みは、単に『雕題』原本の、当時の所在を明らかにしてくれるだけではない。彼の手校本は、本文決定に際して、多大な手掛かりを与えてくれる。このことを、『戦国策雕題』写本の書き込みを例に、以下に述べてみたい。同写本は全五冊から成るが、その第三冊目の末尾には、次のような書き込みが見られる。

中井履軒翁が『戦国策雕題』、余曾て百方捜索し、僅かに

零本を某氏に借り、書生に命じて写し取らしむ。而れども全く周・秦・斉・楚の四策を闕き、常に以て遺憾と為せり。近日某氏を訪い、其の事を談ぜしに、某氏其の蔵する所の翁が手書せし所の『国策』原本を出し示す。乃ち借り来りて、［生］徒に授くるの餘暇に、手づから之を浄書す。是に於いて前に写せし所の「趙策」以下と併せて、始めて完本と為す。（中略）

丙申（明治二十九年）十月十日　南州外史題す

天満宮御文庫所蔵の『雕題』諸写本の内、『七経雕題略』・『史記雕題』・『古文後集雕題』については、履軒の自筆本が懐徳堂文庫に収められている。しかし、『戦国策雕題』については所在未詳であり、懐徳堂文庫にも早野橘隧手写・三村崑山加筆の写本しか収められていない。従って南州の書き込みの真偽は確認できない。しかし、先の『史記雕題』原本の例から推して、南州が『戦国策雕題』原本を見たと考えてよいだろう。

『戦国策雕題』の注釈書としての価値は、同じく中国古代史書である『史記雕題』の注釈の水準に鑑みて、極めて高いものと推定される。しかし、現在、『戦国策雕題』は、『史記雕題』等と比べても、その流布量が少なく、写本（注2）ですら、既に稀覯書である。加えて、『史記雕題』の写本の流布形態、および南州が加筆する以前の写本の様子から察すると、『戦国策雕題』諸写本にも相当に写誤があると考えられる。今後『戦国策雕題』原本の所在が明らかになる可能性は残されているものの、現時点において、大阪天満宮御文庫所蔵の『戦国策雕題』写本は、懐徳堂文庫所蔵のそれと並んで、その原状を探る貴重な存在である。

なお、漢文大系『戦国策正解』（大正四年・冨山房）には、校訂者安井小太郎が、『戦国策雕題』の注を欄上に摘録している。安井は竹添井井より同書を借り受け、校訂を行なったという。その内容と併せて、大阪天満宮御文庫本『戦国策雕題』の詳細について、「大阪天満宮御文庫本『戦国策雕題』について」という論考名で、『懐徳』第六十一号（一九九一年刊）に発表する。

結

南州は校閲を終えると、各冊の末尾にその終了した日時を記している場合が多い。『雕題』諸本のその主なものを挙げれば、次のようなものがある。

癸未（明治十六年）春日　（『戦国策雕題』第四冊）
丙申（明治二十九年）十月十日　（『戦国策雕題』第三冊）
庚子（明治三十三年）十一月十八夜　（『古文後集雕題』下冊）
辛亥（明治四十四年）十一月初六　（『礼記雕題』上冊）
大正戊午（七年）七月四日　（『周易雕題』上冊）
大正己未（八年）十二月十二日　（『周易雕題』下冊）

これらの書き込みの日時をみると、ほぼその在阪期を通じて、南州が『雕題』の原本或はより良い写本を求め、『雕題』本文の決定作業に取り組んでいたことが分かる。

また、『戦国策雕題』の完全な写本が得られないでいたことを「常に以て遺憾と」していたこと、『史記雕題』写本の誤りを正した後で、「是の本　世に出でなば、翁の霊も亦、当に地下に瞑すべし」と記し、同書が世に広まることを念じていたらしいこと等を併せ見ると、南州は履軒の学問を慕い、廃絶した懐徳堂の学統を継がんとしていたのではなかろうか。

大阪天満宮御文庫所蔵の漢籍は、従来の書誌学の観点からすれば、版本としては確かに長沢氏の言われるように、文献学的には、「貴重の書籍と鑑定されるようなものは、ほとんど一部もない」のかもしれない。だが、既に見てきたように、南州の書き込みからは、南州の学問を始め、明治期の漢学の一端を窺い知ることができる。

従来、日本漢学史の研究では、例えば本稿で取り上げた近藤南州のような、明治期の市井の漢学者達は、殆ど光を当てられることがなかった。しかし、近藤南州旧蔵書の事跡を調査していくと、大多数が西洋の学問に傾倒していた時代に、一方で伝統的な漢学を守り伝えようとする、隠然たる動きがあったと思われるのである。今後、南州のように、従来着目されることのなかった漢学者の業績を再評価する必要があると考える。その材料として、大阪天満宮御文庫の漢籍は、正に第一級の貴重な資料なのである。

（注1）滝川亀太郎撰『史記会注考証』には、①・②・④が「考証」に引用されている。滝川氏は、恐らくは依拠した『史記雕題』写本に同様の写誤があることに気付いて、表記を改めて引用している。ただし、②・④については、滝川氏の修正したものは、次のように原本とは異なったものになってしまっている。

②此「卿士」、通卿大夫元士之辞。

④官上右、古法也。

（注2）現在、私が目録等で確認している『戦国策雕題』写本の収蔵図書館には、大阪天満宮・大阪大学懐徳堂文庫以外に次の各館がある。国立国会図書館・無窮会図書館平沼文庫。